

別府の遺物

埋没三百年の像

安部 巖

別府の南端を東流する朝見川に沿つて、人の生活は絶えまなく続けられて来たが、私はその川筋に沿つて続く数限りなき遺跡遺構にふれ、かつてこの地に暮した人々が様々な体験をなめながら、今日の河畔の繁栄を築きあげた事を思う時昔の人に対する身近ななつかしさが湧き起るのをどうする事もできない。

ここに至るまで幾世紀かの人の暮しには、喜びも悲しみも憂いも涙あつただろうがそれらが一つ一つ積み重ねられて今日の文化を築いたのである。こう考える時最早や単なる遺址遺構ではなくて、当時の生きた人々に連なる遺址遺構であることに細いが及ふのである。

然し之等を骨とう趣味で見ようとするとする人がある。遺物を商品として見ようとするとする人がある、又全く振向きもしない人がある、それは見る人の心にまかせて自由であるかも知れない、だが過去の遺物が埋もれる事は悲しい事である。

さて附近の遺址を概見すれば、朝見川の東端浜脇台地の臨濟禪の崇福寺に始まつて、古噴土品を蔵する修福寺、別府最古の寺院宝満寺、金比羅山古墳群、天正九年地藏塔、曹洞禅長松寺、学校教育最古の遺構別府学校、大友能直にまつわる八幡朝見神社、中世の寒鍋山城址、史話に満ちた吉備山・耳取山、更に応永三年板碑寛永キリシタン遺址群、庄内街道、八坂神社に見牛の丘、大友氏時創始の龍源山吉祥寺、観海寺海雲寺、石垣原合戦にまつわる宗像婦部の墓、慧解山、立石山と一連の史址遺概の数々が、或は原形を留めぬ遺址として或はこけむした遺物として、或は緑の木蔭に昔を語りつゝ残る遺構として、過ぎ去つた時代の影を鋭く刻みながら朝見川の奔流に沿つて西に長く伸びているのである。

思えば、長き日本の歴史が留まるべき場所を朝見川畔に見出して小さく展開したと考えられるのではあるまいか。

× × ×

一九五七年の今、観海寺の高台から朝見河畔を望見すれば

銀白色に光る清流に沿つて一連に並ぶ緑の森が視界に入る。

そこには、室町時代乱世の餘波を受け大友大内の争乱に巻きこまれた吉祥寺の悲劇の森が見え更に目を転ずれば一五九六年（慶長五）石垣原の合戦に暗愚義統にしたがつて空しく戦場の露と消えた宗像婦部の丘が望まれ、断庄につぐ断庄に抗してひそかに信仰を続けたキリシタンの森も見える。

苦しみに満ちた歴史の址である。

然し人は過去の歴史を美しく見ようとする、何故だろうか苦しさを忘れたいからだ、苦しさから遠ざかりたいからだ、苦しさがマイナスの柵で常に人に迫っているからだ、それはとうひとなり空しいあきらめともなる。

ともあれ我々は現実を直視しなければならない、直視するとき一つ一つの巨石に営々の労苦を見出す事が出来、見事な遺構に血のひらめきがきこえ、更に又一つの文書、一つの遺物が当代の相刻の中から今日まで辛くも生きのびて来た事が伺えるであろう。

思えば時の流れに順応し、又抗し、今日まで幾百年幾千年も人は生活し続けて来たのである。

♪埋没三百年の像

朝見川畔の森もキリシタン断庄の嵐に見舞れねばならなかつた、断庄につぐ断庄。だがこの森は強靱な信仰を持つキリ

別府の遺物 埋没三百年の像

シタンを守つた。

牧師はひたいた十字の焼燬を当てられた、信者はこの森蔭でひそかにその犠牲者の像を刻んだ、何のために……信仰を続けるために……、出来上つた像は向うむきに石垣に積みこまれた、ひそかに造られた礼拝堂、外見は平靜な石垣であるかくされた像……埋没三百年、

今はなき像を刻んだ、その人の手は震えているだろう、両眼には次々と殺害され行く信者の姿が写つた事だろう、又石垣に積み込んだその瞬間どんな境涯だつたらうか。

之が生々しい人の暮しの一こまでなくて何であろう。

像を刻んだ人の子孫は誰が生きているだろう、しかしその誰かは自分の祖先の信仰を知らないのである。

星移り世変つて三百年、台風はこの石垣をとりこわし、陽光の下にこの像を置いた。この石像からズルズミと近世のキリシタン断庄史は解明される事だろう。

近代観光都市として発達する別府の一隅に一連の哀史を秘めて森は連なる。一九五七、三、一（別府市青山小学校教員）